

ら来た。近く独立するので手伝ってくれと頼まれ、さっそく名古屋で建築工務店を義兄と二人で始めたのが縁で五十三年間も名古屋市民となっている。

帰国したときに、変化に富んだ私の人生遍歴をいつかは記録に留めたいと思い、軍隊、抑留時代の記録を頼りに大学ノートに書いておき、順次細かく書き加えようとしていたのが、ノートを持ち歩いた末に東京御徒町駅のロッカーに置き忘れてなくしてしまった。大失態であった。

今回、思い出すまま書いたが、当時の情景が浮かんでくるときもあり、順序が前後することもあるが、物事を文章に書き留めることの効果というか、鉛筆を走らせているうちに次から次へと思いついてくるのが不思議な程であった。

作戦軍の補給動脈

湘桂作戦中の輜重隊

栃木県 小泉悦郎

私は福島県会津若松市滝沢町一六八番地で、大正十一年三月二十一日に生まれた。家は農業だったので体力には自信があった。徴兵検査を受けたのは、昭和十七年八月二十日、会津若松市の公会堂だった。何人ぐらい検査を受けたか細かいことは忘れた。昭和十七年というと、大東亜戦争も勝ち戦の時で、我々若い者も戦地へ行かねばならないと覚悟をしていた。検査の結果は第一乙種ではあったが、当時は甲種合格者と一緒には現役兵になつた。

入営は、昭和十七年十二月一日、宮城県仙台市の青葉城にある部隊で、東部第三十一部隊だった。その隊は輜重兵連隊で、第二師団、輜重兵第二連隊の留守隊であったと記憶している。輜重兵隊は車両や駄馬と一

緒で、すぐ外地部隊へ転出するとの噂だった。案の定、十日後の、十二月十一日、兵営を出発し、仙台駅から下関まで列車輸送された。下関港からは船で玄界灘を渡るのだ。冬の海峡は荒れると聞いていたが、無事朝鮮の釜山港へ着き、上陸した。生まれて初めて外地の土を踏んだのだから何か気の引き締まる思いがし、また東北育ちの私にも、朝鮮の寒さは肌に厳しく感じた。釜山からはやはり列車輸送で北上したが、内地とまるで違った風景を窓の隙間から眺めながらの無我夢中の列車輸送だったので、記憶は薄れた。途中戦友同士で「遠くへ来たなあ」と語り合いつつも、戦地へ行く前途に、不安を感じながら、新たな覚悟が段々とできてきた。

朝鮮を出て満州、さらに満支国境の山海関を過ぎ、いよいよ北支へ入ったが、家並みも駅の様子も山々も畑も、日本とは違って、いよいよ支那大陸へ来たのだなあと実感した。長い旅の末、着いた所は首都南京の近くの駅だった。それから行軍で、何という駅で何という地名だったかも、五十余年も経過したのでちょ

と思い出せない。

任地は「麻城舖」という部落だった。軍用列車に一週間も乗りっぱなしで、足の脛が腫れて、列車から降りたときは歩行困難な状態だったので、これから行軍するのに歩けるだろうかと心配した。しかし、軍隊という所は無理をしても歩かねばならず、こんな長い日数（一カ月ぐらいかかったか？）を、とうとう行軍しての駐屯地着であった。

この部落は小さい村で、これから本格的な教育が始まった。聞くところによると、普通、初年兵は内地で二、三カ月教育を受け、一期の検閲を受けてから外地へ出発するということだったが、我々は未教育のまま、しかも一カ月以上は船と列車と行軍だったから、兵隊としては未教育兵であった。

これから六カ月間教育を受けるのだ。一般の基礎教育は二カ月もすれば終わるが、特に輜重兵の特科教育もあったから、教育期間が長かった。防毒面をかぶってのガス教育もあり、かぶったままでかけ足、戦闘訓練など、息のつまる中での訓練は特に苦しい。その上、

汗が防毒面いっぱいになり、硝子がくもって外が見えない。

輜重兵としての教育は、馬扱いや自動車操縦・整備もあり、歩兵とは異なった教育だった。輜重は後方にあるからなどと、気安い気持ちではとても務まらない。厳しい訓練は内務班でもあった。古兵もいる、班長もいる。他の戦友に落ち度があれば連帯責任で叩かれる。一般世間では通じない軍隊の習慣があった。そのため、兵としての自覚も、一般学科、術科と共に深められ、兵隊らしくなっていた。

しかし、ここは戦地で、敵が周囲に出没しているのだ。教育中に敵の襲撃を受け、戦友が塹壕に飛び込む瞬間に迫撃砲弾が破裂し、その破片で、三人戦死した。私たちにっては、大きな衝撃だった。驚き、悲しんでいるとき、上官に「戦友の一人や二人戦死したからといって、ビクビクしたら駄目だ」と発破をかけられ、竹刀で叩かれた。これも、我々初年兵を戦地に馴らすためののだと後で気が付いた。そして、戦場とはこんな非情なもののだと肝に銘じた。

一応の教育が終わり、検閲が済んで数日後、今度は、各人各様に各兵科に編成替えされ、専属兵科に区分けられ、各部隊に配属された。そして、それぞれの部隊と共に行動することになった。一緒に入隊し、一緒に支那大陸で教育を受けた戦友が、一方は北支方面、一方は南支方面に、その一方は南方にと、それぞれ転属していった。ある者は遺髪を残し、ある者は遺品を残して別れていった。戦後、その戦友たちで消息が分からない人もいて、奇しくも再会した人もいるが、私は戦後、栃木県矢板市に移ったので、東北の郷土部隊の戦友たちと会う機会は少なくなっている。

私の部隊は輜重兵隊だが、中国大陸の諸作戦には随分参加した。兵科が兵科ゆえ、第一線に立っての直接戦闘は少ないが、何といっても隊の本命は兵団や一線の連隊の生命と任務遂行を左右する兵器・弾薬・糧秣の補給・運搬。第一線の近くまで、物資輸送を行ったが、途中敵襲を受け、しばらく動けなくて山の中で待機し、夕方になりようやく戦線に到着したこともあった。輜重隊は常に小銃を持ってはいるが、その小銃も

短いので車両の座席の後ろに掛けている。敵は輜重隊が戦闘部隊でないことを知り、資材・弾薬・食糧などを狙って襲撃することが多いのだ。従って、我々は非力ではあるが自分の隊を自分で守らなければならないのだ。

作戦で前線の戦闘が激しければ激しいほど、精神的にもまた体力的にも消耗が多い。敵は、後方かく乱に前方との連絡路の遮断にあらゆる手段を尽くして攻撃の手を緩めず攻めてくるので、まさに地獄絵を見る思いをしたことも、しばしばあった。私は戦闘力の最たる兵器、敵から奪った重機関銃の射手を命じられ戦闘したこともあり、押し寄せる敵を撃退したことも度々あった。

この中国での戦闘で強く印象に残り、一番驚いたことは、まさか、中国には来ていないだろうと思っていたアメリカの戦闘機のことだ。P51とか、双胴のロッキードP38とかいう、見たことも無かった戦闘機が、中国の空を縦横無尽に飛び回り、作戦中、行軍中、補給中の我々に、猛烈な機銃掃射を、また爆弾を浴びせ

てきた。特に我々は、戦闘部隊ではないから、多少の対空訓練は受けてはいるものの、その対空戦能力は誠に貧弱なものであり、空襲の都度多人な損害を受け、前線への補給が困難を極めたこともあった。

輜重隊は、駄馬による輸送と車両による輸送があり、私はそのうちの車両隊に配属された。一個中隊の保有台数は大型車が四十台で編成されており、小隊は十両だった。行進、送行のときは誠に勇壮で頼もしかったが、内務班は厳格なものだった。そして、その様な体験を重ねながら中支、南支へと転戦した。大陸打通の湘桂作戦は厳しく、また、犠牲の多い戦闘と連行の連続だった。

行進中、しばしば落下傘爆弾の攻撃を受け、多くの犠牲を出したこともあった。私の所へも、落下傘爆弾が落ちてきたが、たまたま木の枝にひっかかり命拾いをした。もしそのまま落ちてきたら、私の命は無かったことだろう。このような危険を冒しながらの作戦遂行だった。また爆撃のために自動車が破損、故障することも度々あったが、修理班が徹夜をしても修理す

るなど、目に見えぬ苦勞も多かった。これら米軍機による空襲を何度も受け、攻撃は作戦中毎日のように続いた。十五機程の編隊から機銃掃射を受けたこともあった。

作戦は廣西省境を突破し、我が師団は貴州省まで突入した。一時は、蔣介石政府は日本との和平も考えていたらしいと、後で聞いた。昭和二十年の春になり、湘桂作戦反転の命令が下り、我々の進攻は撤退へと変わった。終戦の命令を受けたのは八月中旬だったが、部隊は廣西省から北上し湖南省に入るところだったと、後に上官から聞いた。

重慶軍の我々日本軍の受け入れ方は多様であり、所によっては好意を示し、その裏側では冷遇的であり、敵対的であったりした。撤退行軍中の日本軍に対し、暴力行為をすることも度々あった。

我が部隊は南潯地区という揚子江江畔の九江という付近に駐屯を命じられ、大きな湖水の干拓工事にかかった。毎日、自動車で作業に通い、仕事に従事したが、それ程苦勞を感じなかった。作業の内容は一定してお

らず、上下の差別は大であったことを覚えている。仕事は運搬されてきた土砂の整地と、周囲の清掃作業が主だった。

作業の指導者は、元日本軍の将校が多かったが、総合的な責任者は中国の要人であったようだ。しかし、我々にとっては作業の能率は関係なく、「いつ、復員できるのか」そのことばかりが常に脳裏から離れず、作業そのものには関心はなかった。

そして作業中、戦友仲間であう度に話すことは、内地のこと、親兄弟の安否のことばかりであった。いくつかの「復員の夢」を見ながら、その日に備えて徐々に身の回りの整理をして、内地の思い出話を咲かせ、気の早い者は復員後の生活設計まで発表し、仲間たちを笑わせていた。

その様な思いをしながら、目的の日、復員予定が発表されて、昭和二十一年六月二十六日、上海から出港して佐世保港に入港、上陸し、即日復員になった。

【解 説】

小泉氏の仙台入営は昭和十七年十二月一日頃である。東部第三十一部隊は仙台城内に兵舎がある、仙台師団管区の第二師団の補充隊である。同じ仙台師団管区の師団に、第十三師団があったが、いわゆる、宇垣軍縮により廃止となっていた。しかし、支那事変の勃発（昭和十二年七月七日）により動員下令があり復活した。

昭和十二年九月九日、初代師団長は陸軍中将荻洲立兵である。同年十月七日、上海付近の戦闘、爾来、中支派遣軍の基幹師団となり終戦まで、大陸において各作戦に参加している。

小泉氏の入営当時、第二師団は、ガダルカナル島で苦闘中であり、同年十二月大本営はガ島撤退を決定し、昭和十八年一月四日、ガダルカナル島全兵力撤収の大本営命令が下令されている。

次に第十三師団は、前記の如く、中支方面で諸作戦に参加し、昭和十八年一月一日から二月末まで、中支前門（湖西省西部宜昌東北方）の警備及び江北殲滅作

戦に参加し、三月三十一日沙市に移駐、四月一日（六月三十日まで、江南殲滅作戦および沙市付近の警備をしている。

同師団は七月一日、軍陸甲第三六号により編成改正、編成完結している。なお、小泉氏は部隊名も上官名も、軍隊手帳を焼却しているので判然としないとのことであるが、輜重兵第十三連隊について、その略歴（昭和十八年以降）を記述する。

昭和十八年一月一日（同年三月三十一日

江北殲滅作戦に参加。同作戦とは、中支第十一軍が漢口、岳州、沙市を連ねる揚子江北岸の三角地帯の敵を覆滅し、王頸哉第一二八師長を捕獲し、次いで一部をもって沙市対岸及び石首、華容付近の要城を新たに占領した作戦で、第十三師団の主力が参加、当然輜重兵第十三連隊（原田親雄連隊長以下）が参加し、他に第三十四・第四十・第五十八師団及び、第二・第三十九師団の一部、独立混成第十七旅団・独歩第六十一大隊等も参加している。

同年四月十六日（六月二十五日 江南殲滅作戦

第十一軍が揚子江の輸送力強化のため、宜昌付近にある合計一万数千トンの船を下航させるとともに、洞庭湖から宜昌対岸の山岳地帯にわたる揚子江右岸地域の敵野戦軍を激滅する目的で行われた作戦である。

第十一軍は江北作戦を第一号作戦、江南作戦を第二号作戦と仮称していた。輜重兵第十三連隊も、赤鹿理師団長の隷下、歩兵・騎兵・山砲・工兵連隊が参加した。

同年七月一日 編成完結―陸甲第二六号。

同年十月二十八日～十二月二十七日 常德殲滅作戦

第十一軍が、その主力及び第百十六師団等をもって、常德及びその周辺地域の敵軍撃滅等を目的とした作戦で、第十三師団も主力をもって参加し、輜重兵第十三連隊も原田親雄連隊長以下参加。

昭和十九年四月二十九日～同年八月八日

湘桂作戦第一期に参加

同年五月二十七日

第十連隊から、補充員一一九人到着

同年八月九日～同年十二月二十日

湘桂作戦第二期に参加

同年八月二十二日

輜重兵第七十二連隊から補充兵一九〇人到着

同年十二月二十一日 広西省宜山県理苗付近の警備

昭和二十年一月十二日

輜重兵第七十二連隊から補充員、将校三人、兵二

九七人到着

同年一月二十日 広西省柳城に移駐

同年四月十五日～四月二十九日 都安作戦に参加

同年五月四日～八月十三日

湘桂反転作戦第一期に参加

同年八月十四日 停戦詔書発令

同年九月三日～十月五日

終戦後における南潯地区への転送

同年九月二十三日

輜重兵第二連隊補充隊から、現役兵四〇〇人到着

同年十月七日 江西省湖口地区に集結

昭和二十一年五月二十五日

内地帰還のため湖口出発

同年六月十六日 上海出帆

同年六月二十七日 佐世保港上陸

同年六月二十八日 復員式挙行

1 将校 122人 下士官 1321人

兵 443人 計 686人

既に帰還せる除隊召集解除者 512人

2 入隊患者 215人

3 生死不明者 16人

4 上海残留者 5人